

地域に活かす事業をかたちに! 地域向け講演会「高齢者住宅セミナー」と「サービス付き高齢者向け住宅『美しが丘テラス』開設説明会」レポート!

平成26年2月21日、清田区民センターにて、当法人主催「高齢者住宅セミナー」と平成26年9月、札幌市清田区に開設予定の「サービス付き高齢者向け住宅『美しが丘テラス』説明会」を開催しました。地域の皆さまの関心も高く、清田区内にお住まいの44名が参加された今回の講演会の模様をお伝えいたします。

高齢者住宅を選ぶために



前半の「高齢者住宅セミナー」では、コンサルタントによる高齢者住宅を選ぶポイントと介護保険の基礎知識についての話を、皆さまがとても熱心に聞き入っていたのが印象的でした。講演後の質疑応答では、相談機関のことや介護認定についてなどたくさんのご質問がありました。「実際にサービスを使わなければ、介護保険サービス利用の手続きや仕組みはわからないので、勉強になった」という声も多数いただきました。後半は、当法人が現在建築中のサービス付き高齢者向け住

宅「美しが丘テラス」について、ハード・ソフト両面から概要を説明いたしました。

「美しが丘テラス」について

「美しが丘テラス」は、ハーフ面の特徴として、居住部分は冷暖房・収納・緊急時コール完備、共用部分にはゆとりある空間（各階ラウンジ・食堂、シアタールーム、トランクルーム、パーティールーム、家族室、喫煙室等）が設けられています。

食堂は各フロアに設け、生活の中での大きな楽しみでもある食事内容は特に大切に吟味しています。また、介護が必要になつても医療と連携し介護サービスを利用しながら最後まで生活を続けられること、日中を楽しく過ごすためのサービスも検討しています。

併設するデイサービスでは、マシンも活用し、心身のリハビリ効果が高い内容を検討をする一方で、温かい家庭的な面も大事にしています。また、併設する小規模多機能型居宅介護は、通い（デイサービス）、泊り（ショートステイ）、訪問（ホームヘルプ）の3つの機能をいずれもご利用いただける便利なサ

ービスです。通いでは認知症の方に役立つプログラムも考えられています。併設する事業については、全て入居者はもちろん地域で必要とされる方々にもご活用いただきたいと思います。



開放的でゆったりくつろげるカフェスペース

交流が生まれる 場を目指して

自分たちが住みたい、自分の家族に住んで欲しいと思える住まいのあり方を開設準備スタッフ一同模索していく

ます。ここで暮らす方々の笑顔に出会うことが今から待ち遠しいです。

人々に生きるヒントを与えてくれます。向谷地先生のどんな人をも受け容れる寛容さ、どんな時にもおもしろみを見つけ出すアンテナは、かつて病院や地域で絶望と孤独の窮地に立つ患者さんやご家族と、長年とことん付き合いぬいた中で育まれた感性そのものです。

日本の精神科医療は激動の時代を迎えようとしています。その中で当事者研究は、患者・支援者の枠を越えて苦労を抱える全ての人々に、「人」としての本質を問い合わせ、生きるための術と気づきを与え、そして、医療現場と地域に新たな価値観の架け橋をさりげなく築いていく—そんな役割が待っているように私には思えます。



総合企画室 森 加名恵

講演後は、入居に関するご質問や入居した際のご要望を多数受け、仮申し込みも受け付けました。

講演後は、入居に関するご質問や入居した際のご要望を多数受け、仮申し込みも受け付けました。

緑豊かな環境、地域に開かれた空間で潤いのある生活を実現します。

サービス付き高齢者向け住宅「美しが丘テラス」

札幌市清田区美しが丘3条8丁目
鉄筋コンクリート造 地上4階
(敷地面積 6,480m² 延床面積 4,055m²)
住戸数 45戸(自立型25、介護対応型20)、
カフェ、地域交流スペース
併設介護事業所(居宅介護支援事業所・通所介護事業所・
小規模多機能型居宅介護事業所・訪問介護事業所)

**平成26年9月開設
入居者募集中**

4つの介護事業所を併設。
多様なサポートにより、快適で安心な生活をご提供する複合施設です。

*入居問い合わせ: さっぽろ香雪病院内
「美しが丘テラス」開設準備室 菊地、森(加)
011-351-6880

*「美しが丘テラス」の進捗は、病院ホームページ
および「テラス通信」で随時お知らせ致します。

学術研修会「精神保健福祉におけるリカバリーの理念と当事者研究の実践」

北海道医療大学 看護福祉学部教授 向谷地 生良 先生

当事者研究は、浦河「べてるの家」の当事者と浦河日赤病院ソーシャルワーカーであった向谷地先生らで積み上げてきた「当事者という病気の専門家による、経験から生み出された実践的研究」です。その仕組みと可能性について、当事者の方と共にご講演いただきました。

精神病状の起り方、引き起こされる行為（爆発する、電波がくる等）からくる苦しい状態（=苦労）の起り方は、個々に何らかの因果や規則性および反復する構造があります。仲間と語る中でそれをイラストや図式、ロールプレイなどで見える化し、苦労を否定せず、起こっている問題の経緯や意味などを共有するもので、認知行動療法をベースにSSTの手法が取り入れられています。そもそも病気になること自体、すでに自分を助けようとしている現れであり、そこには大きな可能性が秘められていると捉えます。いまや当事者研究は、大学で、多分野で取り上げられています。また、先行研究の数々は「べてるスキルバンク」に蓄積され、後に続く悩める

人々に生きるヒントを与えてくれます。

向谷地先生のどんな人をも受け容れる寛容さ、どんな時にもおもしろみを見つけ出すアンテナは、かつて病院や地域で絶望と孤独の窮地に立つ患者さんやご家族と、長年とことん付き合いぬいた中で育まれた感性そのものです。

日本の精神科医療は激動の時代を迎えようとしています。その中で当事者研究は、患者・支援者の枠を越えて苦労を抱える全ての人々に、「人」としての本質を問い合わせ、生きるための術と気づきを与え、そして、医療現場と地域に新たな価値観の架け橋をさりげなく築いていく—そんな役割が待っているように私には思えます。

総合企画室 森 加名恵